

苫前町地域おこし協力隊活動計画書

苫前町有害鳥獣利用推進事業 (小規模ジビエ処理施設整備・運営事業)



2026.5.28

かわはらだ ひでのぶ

制作：河原田 英伸

北海道における有害鳥獣被害の現状

北海道の有害鳥獣被害は深刻で、2024年度の農林水産業被害額は前年比2%増の約64億円です。5年連続で増加しています。

被害の約8割はエゾシカによる食害や牧草地荒らしであり、ヒグマによる人身被害も過去最多規模で推移するなど、農業被害と安全の両面で大きな問題となっています。

被害の現状と特徴（2026年時点）

- 被害額の増加: 2024年度の農林水産業被害額は約64億円。特に農業被害が大部分を占める。
- エゾシカ被害（主因）: 被害全体の約8割を占める。農作物（デントコーン、ビート、水稻など）の食害に加え、道路への飛び出しによる交通死亡事故も4,480件超（過去最多）と深刻な状況です。
- ヒグマ被害: 近年人身被害が増加傾向。2023年度は9人が死傷する過去最悪の被害。5年間の人身被害者33人のうち約70%が4月～8月に集中しております。
- その他: アライグマやカラスによる被害も拡大傾向にあります。

北海道における有害鳥獣被害の現状



エゾシカによる農作物への被害



ヒグマが市街地を徘徊

・鳥獣の飛び出しなどによる交通事故の増加など社会問題が近年増えております。

現状の課題

1. 担い手（ハンター）に関する課題

深刻な高齢化：現役ハンターの多くが60代～70代以上であり、体力の衰えから山岳地帯や過酷な環境での駆除が困難になっている。

圧倒的な人手不足：若手や新規の免許取得者が少なく、引退する人員に対して補充が追いついていない。

高度な技術の継承断絶：大型獣（クマやシカ）などの安全な追跡や発砲には長年の経験が必要だが、ベテランの引退により技術が途絶えつつある。

平日の稼働力低下：若いハンターは会社員などの本業を持っていることが多く、平日の日中に発生する緊急の駆除要請に対応しづらい。

2. 野生動物（有害鳥獣）に関する課題

爆発的な個体数の増加：天敵がいないことや、温暖化（少雪化）による冬の生存率向上により、シカやクマなどの個体数が急増している。

生息域の拡大（人里への進出）：過疎化や耕作放棄地の増加により山と街の境界線が曖昧になり、動物が人間の生活圏（市街地）に日常的に出没するようになっている。

動物側の学習と警戒心の強化：罠の設置場所や人間の行動を学習した動物が増え、従来の捕獲方法が通用しにくくなっている。

現状の課題

1. 担い手（ハンター）に関する課題



深刻な高齢化：現役ハンターの多くが60代～70代以上であり、体力の衰えから山岳地帯や過酷な環境での駆除が困難になっている。



圧倒的な人手不足：若手や新規の免許取得者が少なく、引退する人員に対して補充が追っていない。



高度な技術の継承断絶：大型獣（クマやエゾシカなど）の安全な追跡や発砲には長年の経験が必要、ベテランの引退により技術が途絶えつつある。



平日の稼働力低下：若いハンターは会社員などの本業を持っていることが多く、平日の日中に発生する緊急の駆除要請に対応しづらい。

2. 野生動物（有害鳥獣）に関する課題



爆発的な個体数の増加：天敵がいないことや、温暖化（少雪化）による冬の生存率向上により、シカやイノシシなどの個体数が急増している。



生息域の拡大（人里への進出）：過疎化や耕作放棄地の増加により山と街の境界線が曖昧になり、動物が人間の生活圏（市街地）に日常的に出没するようになっている。



動物側の学習と警戒心の強化：罠の設置場所や人間の行動を学習した動物が増え、従来の捕獲方法が通用しにくくなっている。

現状の課題

3. 社会環境・人間側の要因

中山間地域の過疎化と高齢化：農山村に人の目が減ったことで、動物を追い払い威嚇する「人間の圧力」が低下している。

耕作放棄地の増加：管理されなくなった農地が雑草や藪で覆われ、野生動物にとって格好の隠れ家や餌場になっている。

住民の防護意識の希薄化：生ゴミの放置や、防護柵（電気柵など）の不適切な管理が動物を誘引する原因になっている。

4. 経済・制度面および処遇の課題

割に合わない費用負担（赤字リスク）：報償金に対して、事前の見回り費用、弾代、備品、装備、車両維持費、さらには処分施設への搬入焼却費用がハンターの自己負担になるケースが多く、やればやるほど負担が増える構造になっている。

安全確保と法規制のジレンマ：銃器の使用には厳しい規制があり、市街地付近での発砲は法的なリスクや周囲の目が厳しく、ハンターが責任を負いきれない場面が増えている。

ボランティア精神への過度な依存：地域を守るという民間（猟友会など）の善意に頼り切った体制であり、行政や社会による職業的な地位・保障が確立されていない。

現状の課題

3. 社会環境・人間側の要因



中山間地域の過疎化と高齢化：農山村に人の目が減ったことで、動物を追い払い威嚇する「人間の圧力」が低下している。



耕作放棄地の増加：管理されなくなった農地が雑草や藪で覆われ、野生動物にとって格好の隠れ家や餌場になっている。



住民の防護意識の希薄化：生ゴミの放置や、防護柵（電気柵など）の不適切な管理が動物誘引する原因になっている。



平日の協働力低下：若いハンターは会社員などの本業を持っていることが多く、平日の日中に発生する緊急の駆除要請に対応しづらい。

4. 経済・制度面および処遇の課題



割に合わない費用負担（赤字リスク）：報償金に対して、事前の見回り費用、弾代、備品、装備、車両維持費、さらには処分施設への搬入焼却費用がハンターの自己負担になるケースがやればやるほど負担が増える構造になっている。



安全確保と法規制のジレンマ：銃器の使用には厳しい規制があり、市街地付近での発砲は法的なリスクや周囲の目が厳しく、ハンターが責任を負ってきれない場面が増えている。



ボランティア精神への過度な依存：地域を守るという民間（猟友会など）の善意に頼り切った体制であり、行政や社会による職業的な地位・保障が確立されていない。

有害鳥獣対策の現状：ハンター不足と高齢化

高齢化の実態

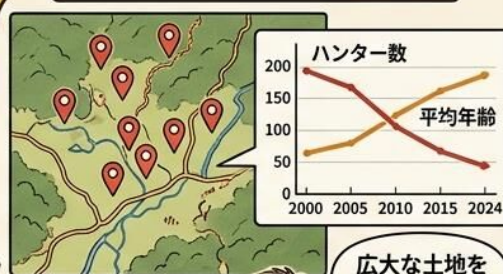
体力が落ちてきた...

後継ぎがいればなあ...

罾の点検

深刻な人手不足

広大な土地を少人数でカバー



毎日これじゃ体が持たない...

広大な土地を少人数でカバー

増え続ける被害

捕獲目標未達成
年禰年度
年間被害額

農作物被害



有害鳥獣の捕獲から焼却処分施設までの流れ

① 猟銃で捕獲

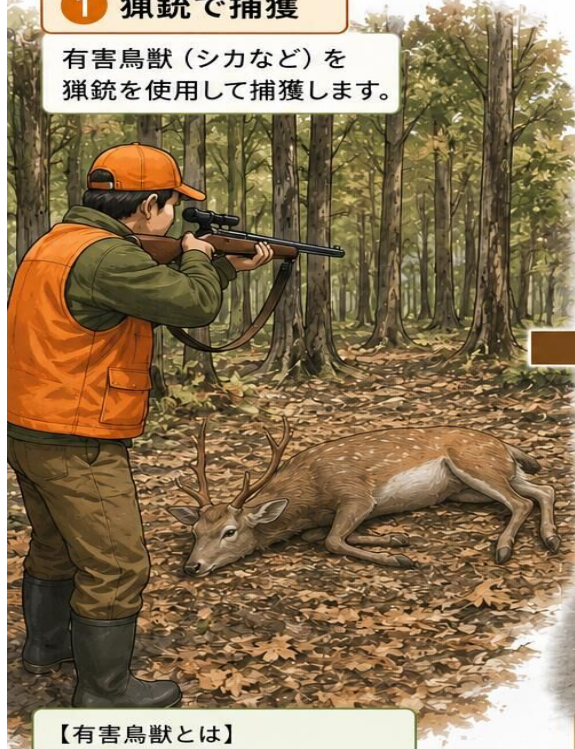
有害鳥獣（シカなど）を
猟銃を使用して捕獲します。

② ハンターが運搬

捕獲した個体を法令に従って
確認・記録し、焼却処分施設まで
運搬します。

③ 焼却処分施設へ搬入・処分

焼却処分施設に搬入し、職員の指示に
従って受け渡した後、適切に焼却処分
されます。



【有害鳥獣とは】

農作物や生活環境に被害を
与える野生の鳥獣のことです。



【遵守すること】

- ・鳥獣の種類、捕獲日時、場所などの記録
- ・運搬時の衛生管理（シートの使用など）
- ・関係法令の遵守



注意事項

- ・関係者以外
立入禁止
- ・指示に従うこと
- ・衛生管理の徹底

適切な処理により、環境保全や
生活被害の軽減につながります。

有効活用へ向けた取り組み

1. 食資源としての活用（ジビエ）

ジビエ料理の提供：シカやイノシシの肉を地域の飲食店、ホテル、学校給食などで活用する。

加工食品の開発：ソーセージ、ハンバーグ、カレーのレトルト缶などの長期保存が可能な商品を販売する。

ペットフードへの加工：栄養価の高さを活かし、犬や猫向けのジャーキーや高級キャットフード、ドッグフードとして製品化する。

2. 素材・工業資源としての活用

皮革製品（レザー）の製造：イノシシやシカの皮をなめし、靴、鞆、財布、衣服などの高品質な革製品に加工する。

工芸品・アクセサリーの制作：シカの角や骨、クマの爪などを加工し、伝統工芸品、インテリア、アクセサリーとして販売する。

美容・健康成分の抽出：猪脂（ウリ坊油）を化粧品（石鹸やクリーム）の原料、あるいはサプリメントの成分として活用する。

動物園・サファリパークの餌：肉食獣（ライオンやトラなど）の給餌用として、適切な衛生管理のもとで寄付・供給する。

3. 観光・教育・ビジネスとしての活用

狩猟・ジビエ体験ツアー：都市部の住民や観光客向けに、解体体験やジビエの試食、狩猟文化を学ぶエコツーリズムを実施する。

トレーサビリティの導入：捕獲から加工までの流通経路をデジタル管理化し、安全なブランド食材として都市部の高級レストランへ販路を拡大する。

期待される効果

- **鳥獣被害対策の推進** ・ ・ ・ 適切な捕獲により農林業被害の軽減につながります。
- **地域資源としての活用** ・ ・ ・ ジビエやペットフードとして活用することで、命を無駄にしない循環利用が可能になります。
- **焼却処分量の削減** ・ ・ ・ 利用できる部分を増やすことで、焼却コストや環境負荷の軽減につながります。
- **地域活性化** ・ ・ ・ 地域産業や雇用創出、観光・食文化振興への効果も期待されます。

今後に向けて

捕獲→加工→流通→販売→資源循環 を地域全体で連携し、「駆除から有効活用へ」転換していくことが重要となっていきます。

有害鳥獣を単なる処分対象ではなく、地域資源として活かす取り組みが、持続可能な地域づくりにつながって行くと思います。

有害鳥獣を有効活用する仕組みの流れ

捕獲から食肉利用、そしてどうしても利用できない部分のみを焼却処分し、資源の循環と地域社会に貢献します。

1 猟銃で捕獲

有害鳥獣（シカなど）を
猟銃を使用して捕獲します。



2 捕獲個体の運搬・確認

捕獲した個体を法令に従って
確認・記録し、食肉利用可能か
確認したうえで食肉加工施設へ
運搬します。



3 食肉加工施設での処理・加工

衛生的に解体・精肉処理を行い、
安全・安心なジビエ肉として
加工・管理します。



4 食肉の提供・活用

安全でおいしいジビエ肉を、さまざまな形で
地域の皆さまへ提供します。



地域資源として有効活用され、鳥獣被害の軽減と
地域の活性化に貢献します。

5 利用できない部分の有効活用（ペットフード・おやつへの利用）

食肉として利用できない部分も、命を無駄にせず、ペットフードやおやつに生まれ変わります。

ペットフードへの加工

内臓や骨、スジなどを
加工し、ペットフードの
原料として活用します。



犬や猫のおやつへの加工

乾燥や加熱などの処理を行い、
安全・安心な犬や猫のおやつ
として提供します。



6 焼却処分（最終処分）

どうしても利用できない部分のみを
焼却処分し、環境に配慮して適正に
処理します。

焼却される量を最小限に

食肉やペットフード・おやつとしても利用することで、
焼却処分する量を大幅に削減し、環境負荷の低減と
コスト削減につなげます。



この仕組みの効果



鳥獣被害の軽減

有害鳥獣を適切に捕獲することで、
農林業被害の軽減につながります。



地域資源の有効活用

ジビエ肉やペットフードなどに活用
地域の資源をムダなく活かします。



地域の活性化

食肉の提供やペット販売を通じて
地域経済の活性化に貢献します。



環境負荷の低減

焼却処分を最小限に抑え、
環境に配慮した持続可能な社会を
目指します。

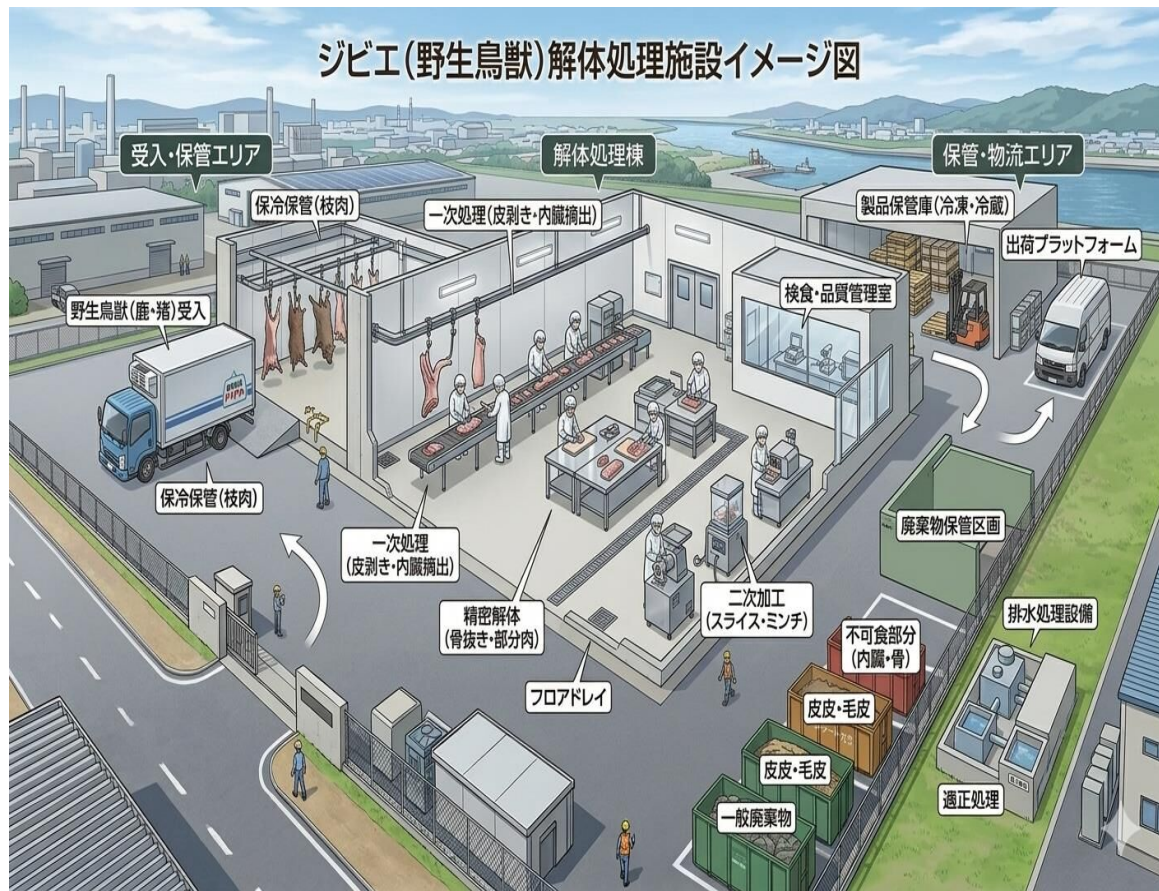
人と自然が共生する未来へ

鳥獣を「害」ではなく「資源」として捉え、
命を無駄にせず、地域で循環させることで、
持続可能な社会の実現を目指します。



1. 事業概要

- ・ 苫前町におけるエゾシカ・ヒグマ等の有害鳥獣捕獲後の適正処理および高付加価値化を図るため、町内に小規模食肉処理施設を整備し、捕獲個体の有効活用・地域資源化を推進する。
- ・ あわせて、ペット向け加工品・食肉製品の製造販売を行い、地域内経済循環、将来的な雇用創出を目指します。



2. 事業の必要性

次世代への食育と地域貢献：地産地消のシンボルとして**学校給食**へ導入し、子どもたちに命の尊さや地域の環境課題を伝える「生きた食育」を実践します。

廃棄ゼロの市場開拓：端肉や骨を安心・安全な**ペットフード**へ加工し、拡大を続けるペット市場へ投入することで、捕獲した命を100%、**捕獲個体の有効活用**が行えます。

一次産業の防衛と地域課題の解決：深刻な食害をもたらす野生鳥獣の捕獲・受け入れ体制を強化し、農家の経営と暮らしを守ります。

外貨獲得とブランド化：徹底した衛生管理により最高品質の精肉を**高級レストラン**へ供給し、地域のプレミアム食材として都市部から外貨を獲得します。

地域経済の活性化と雇用創出：これまで多額の費用をかけて埋設・焼却処分していた「厄介者」を、高い付加価値を生み出す「地域の財産」へと変貌させ、施設の運営、解体・加工職人の育成、流通・販売にいたる一連のプロセスにより、地域内に持続可能な雇用を生み出します。

SDGs・持続可能な資源循環の体現：レストラン・給食・ペットフードへの多段階利用により、資源の廃棄を最小限に抑える環境配慮型のモデルを構築します。「環境保全」と「経済循環」を両立させ、過疎化や高齢化が進む地域が自立して生き残るための強固な社会的基盤（インフラ）となります。

※本施設整備により、捕獲から活用まで、地域内完結モデルを構築する事が重要と考えております。

3.事業スケジュール

・初年度（1年目）地域の皆様にお力をお借りし業務を拡充してまいります。

- ・ 空き店舗・倉庫・物件の模索（スモールスタートで運営開始が出来るところから）
- ・ 地域交流の場へ参加（鳥獣の駆除を積極的に行う上で地域の方々から頂く情報が不可欠。知って頂く活動も含め行います。）
- ・ 有害鳥獣捕獲に向け、地域情報（国有林・道有林・民有地）など地形や場所の把握、調査を行います。
- ・ 捕獲準備・改良（猟場での安全管理を含めた備品、道具の整備・準備を行います。）
- ・ 年間50頭処理体制構築（処理施設の運用整備を拡充して行きます）
（食肉処理施設の目途が立たない場合、ペット加工品の製造販売にて業務推進してまいります。）
- ・ 各種必要な資格の取得（鳥獣を駆除、処理する上で必要な資格を取得してまいります。） わな免許や食品衛生責任者など。

・2年目 業務安定化に取り組む年

- ・ 年間50頭から80頭へ拡大
- ・ 道内・国内販路開拓（苫前町を発信拠点とし道内、国内、海外もシェアにいれ販路を開拓して行きます。）
- ・ ふるさと納税返礼品登録（可能な商品を登録し地域資源のPR活動の拡充を進めて参ります。）

・3年目 安定から再加速、開業準備、雇用創出にむけ活動を行います。

- ・ 年間150頭体制確立（雇用創出を目的とし処理体制を構築）
- ・ 雇用2名創出検討（正規雇用を目指し企業安定化を促進する）
- ・ 苫前町地域ブランドとして確立（苫前町を全国にPR出来る商品ブランドの確立を目指す。）
- ・ 苫前町、法人企業設立に向けて準備。

お力添え宜しくお願い致します。